

本阿弥現代俳句シリーズⅧ

句集八重櫻

吉野のぶ子

著者略歴

吉野のぶ子（よしの・のぶこ）

1939年3月15日 埼玉県川越市に生まれる

1983年6月 小澤克己に師事

1992年5月 「遠嶺」入会

1993年5月 「遠嶺」同人

1999年5月 「遠嶺」高嶺集同人

現住所 〒350-0815 埼玉県川越市鯨井1538-10

TEL・FAX 0492-31-4774

句集 八重 櫻 <本阿弥現代俳句シリーズⅦ>

2000年7月25日 初版

定 価：本体2800円（税別）

著 者 吉野のぶ子

発行者 本阿弥秀雄

発行者 有限会社 本阿弥書店

東京都千代田区猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068（代） 振替 00100-5-164430

印 刷 三和印刷 製 本 松栄堂製本所（1425）

©Nobuko Yoshino 2000 ISBN 4-89373-604-3

序

本句集『八重櫻』の著者・吉野のぶ子さんのことを書くのは嬉しい。

それは、吉野さんも「遠嶺」創刊に関わった「秋嶺俳句会」の主要メンバーの一人であるが、入門されたのは、たしか四十代始めの頃だったと思う。私とはそんなに年齢は離れておらず、明るくて、芯のしっかりとした性格は魅力的で、私に姉がいたら、きっと吉野のぶ子さんのような人なんだろうなと、ひそかに想ってきたからである。

そのような吉野のぶ子さんの句集『八重櫻』の題名は、

八重櫻 父の慈愛に触れにけり

という作品から採った。十代でご尊父を喪くされたのぶ子さん。おそらくそれ以後は、心の内側で、片時も忘れることのできない存在になっていったであろう。私も、

十代の始めに実父を喪しているだけに、のぶ子さんの掲句には深く共鳴する。

だが掲句は嘆きではない。八重櫻という、遅咲きながら、明るくて、穏やかさと華やきでもって、存在感のある花は、まさしく著者・吉野のぶ子さんにぴったりであり、亡き父の、生前の優しさ、大きさ、深い愛情を一句の中に彷彿とさせ、見事に蘇らせている。

のぶ子さんも、川越生まれの川越育ちで、私と共通するものも多い。川越という「小江戸」の小粋でさっぱりした気質も、どこか通じ合う所もあり、やはりその辺が、二十年近くになる俳句の縁につながっていると思える。

さて、初期の頃の作品（「花辛夷」の章）から見ていきたい。

イヤリング素直にゆれて花の中
夜の秋の能くれなるに乱舞せり
色あせぬ恋にも似たり鶏頭花
時雨忌やさらにまぶしむ空のあり
ひとひらの和紙よりうすき冬櫻

一句目、先に「姉のような存在」と書いたが、句中に顕れている所作が、自ずとそのように思わせるのであろう。若々しさと女性らしい含羞がある。二句目、のぶ子さん等と、「川越薪能」（毎年八月下旬に行われる）を観賞した時のものである。秋能の臨場感があって、説得力が感じられる。三句目、嬬やかさがあり、しかも万葉人の恋歌のよろしさをもった好句である。四句目、芭蕉忌（冬季）を、時雨忌とも呼ぶが、へさらにまぶしむ空のありゝには、深い想いにさせられた。芭蕉の「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」の詩魂を掬い取っている内容だと、感銘を深めた。五句目、冬櫻の洒然とした風姿を、へひとひらの和紙よりうすきゝは、巧い。物の生命の象徴の域に達した表現であると感心した。

以上、掲出の五句には、著者初期の詩性の良さがよく顕れていたし、おおらかに、開放的な気質も併せ持っているのぶ子さんの、快調な出発のよろしさが感じられる。

それでは、次章（「向日葵」）に目を向けると、

ちからある山の音して夏匂ふ

未来ある子に向日葵のやうな夢
幾尾根を越えて夏野を近くせり
蕪村の忌学ぶ心をととのへし
少しだけことばのほしき寒牡丹

本年は、「情景主義」に、テーマとしての「△華やぎ▽と△具象▽」を添えたいと、「遠嶺」誌や出版される句集（序文）でも述べさせて戴いている。のぶ子さんの情景俳句は、そうした想いも当然に通わされているが、私がさらに魅力を感じるのは、一句目にある、「自然からの生命の力」を感受する詩性、二句目の、「未来へと視野を啓く」姿勢、三句目の、「現実の存在」を自然・風土の中での確に把握する才能、そして四句目の、師系（芭蕉・蕪村・子規・虚子・秋櫻子・登四郎・克己）の揺るぎない認識への心、さらに五句目の、「物（寒牡丹）」への肉薄した詩心など、多彩な著者の持ち味であり、才覚である。確かに、句集中、亡き父母や姑などへの愛惜の念あふれる作品は多い。しかし、それも、のぶ子さんの心の尋さであり、深さであり、温かさであることの証である。このことで、何ら他人から批判さ

れることがあろう。

著者を永年見てきて、どこかへおっとりVとしていて、良きお嬢様が、そのまま奥様になられて、いままで来られたのではないかというイメージがある。よく季節ごとの吟行句会で、ご一緒させて戴くが、なるほどと感じつつ、心穏やかにさせられる。それは、きつと育った実家の環境も当然だったが、嫁がれた家の、ご主人や姑様の人柄等の良き環境の恩恵があったからだろうと、推察できる。こうした、心の土壌とでも、風土とでも言うのか、わが「遠嶺」のへ情景俳句Vに、良き影響をもたらしてきたというのは過言ではない。

このことは、次章「秋海棠」にも、好句をもたらししていることでも分かる。

叫びたき思ひを羽子にたくしけり

青霞して一睡の千枚田

午前二時夫の机の春燈

緑蔭にゐてなほ遠き嶺望む

天高し白一色の博物館

掲五句、これらには、「情景俳句」の一つの成果が窺われる。俳句の象徴を物（羽子）に託し、詩の骨法を如実に表現した一句目。「遠嶺」主流の表現である「○として」調を見事に自分流に表現された二句目。最愛の夫君の、夜遅くまでの仕事に對する、温かい愛の眼差しを、物（春燈）によつてクローズアップさせた詩表現のみごとさの三句目。この句には、無類の夫婦句吟のよろしさが通つており、感銘を深めさせて戴いた。例えば本句集上梓への、最初の推奨者は、ご夫君であるという。誠にご同慶にたえない。そして四句目の前向きの姿勢は、著者の持ち味が出ているし、五句目なども、すつきりと確実な表現で、秋空に建つ白亜の博物館を象徴した。やはり、着実な著者の進展が窺えて嬉しくなる。

ところで、四章・五章は、平成九年から平成十一年までの作品を、前半（春・夏）と後半（秋・冬・新年）に分けて編集されている。ここにも、著者の作品への深い想いが窺える。

その、四章（「藍浴衣」）には、

慈しむ櫻観るのはこの衣

黄水仙 一所に秘めし文の束
星降れば星のいろなり春の海
真清水を含み千段登りきる

以上、四句ほど引いたが、どの句もすこぶる完成度の高い作品となっているのに驚かされる。これもひとえに、のぶ子さんの努力であり、磨かれた詩性・感性の賜ものである。

この紅葉永遠に栞りて旅惜しむ
一嶺の紅葉は我のしるべかな
大枯野意地の一句の出来るまで

掲三句は、最終章「山茶花」より引いた。これらの句には、著者のぶ子さんの、永遠なる祈りというのか、詩魂の明らかな姿が見えている。それを、「永祈する情景俳句」と呼び、末永く讃え愛誦していきたい。そして不変の詩性を携えた作家の

誕生を、心から喜びたい。

最後に、益々その詩性を磨かれ、さらに深化されていく、「永祈する情景俳句」と、この度の句集『八重櫻』の上梓を心から祝し、ここに感銘作品を掲げ、擱筆とさせて戴く。

露草に屈みて胸を濡らしけり
藍浴衣鼻緒と帯は赤くして
父在らば今でも通す白紵
流星や口には出せぬ言葉あり
初旅や大海原へ切符買ふ

平成十二年六月五日 芒種の夜にて

小澤 克己

目次

序

小澤 克己

花辛夷

昭和五十八年～平成二年

向日葵

平成三年～五年

秋海棠

平成六年～九年

藍浴衣

平成九年～十一年（春・夏）

山茶花

平成九年～十一年（秋・冬・新年）

あとがき

装 幀

海保 透

句集

八重
櫻

吉野の
ぶ子

花
辛
夷

昭和五十八年～平成二年

